

高等学校新入生グループ体験プログラムの効果の検討

曾山 和彦

Effect of Group Work Program for High School New Pupil

Kazuhiko Soyama

[問題と目的]

文部科学省(2007)によれば、高等学校に不登校及び中途退学の発生率は、全日制、定時制共に第1学年の比率が高いことが示されている。不登校生徒のうち中途退学に至った者の比率は37.3%であり、実に4割弱の生徒がいったん不登校になると中途退学につながるという由々しき事態を示す数値であるといえよう。高等学校中途退学者のその後について、追跡調査を試みた兵庫県教育委員会(2005)では、就職40.4%、無職11.5%という数値を明らかにしており、高等学校中途退学者問題は、現代の社会問題となりつつあるフリーター・ニート問題との連動も懸念される場所である。青年期中期の発達段階にある高校生は、青年期前期の中学生と共に、「疾風怒濤期」と形容される思春期段階に相当する。思春期は、親からの心理的離乳が中心的な発達課題であり、それまでの親との関係に代わって不安を共有できる友人関係の構築が欠かせない。青年の学校への適応感とその規定する要因を検討した大久保(2005)によれば、友人関係は学校への適応感に強い影響を与えることが明らかになっている。また、植村(2003)は、高等学校入学時の学校適応感について時期による比較検討を行い、4月、7月の適応感が12月時点よりも高いことから、入学時には学校への期待感や進学・入学による喜びが含まれているのではないかと述べている。これらの先行研究から、高校生は、入学後できるだけ早い時期に友人関係を構築することにより、学校適応感が増すということが考えられる。

吉原・藤生(2005)は、高校生の学校生活不適応状態について、原因を学校ストレス、特に対人ストレスの問題ではないかと指摘し、対策として親密性を高める友人関係づくりの必要性を述べている。一般に、友人関係は、小学生(中・高学年)のギャンググループ、中学生のチャムグループから、高校生のピアグループへと段階的に発達する。ギャンググループにおける親密さは、同一行動を前提とした一体感によるものであり、チャムグループにおける親密さは、互いの共通点を言葉で確認することによるものである。また、ピアグループにおける親密さは、互いの異質性をぶつけあい違いを明らかにしつつ自分自身を確認することによるものである。保坂・岡村(1986)は、友人関係の発達段階が次の段階に移行するためには、グループ体験を通して、満たされていない友人関係を再体験することが必要であると述べている。

本研究では、これらの研究知見をもとに、高等学校新入生を対象とした友人関係づくりプログラムについて検討する。プログラムには、新しい人間関係づくりやリレーション形成の技法である構成的グループ・エンカウンター(structured group encounter; 以下SGE

と表記する)のエクササイズを取り入れ、その効果について検討する。SGE を取り入れた友人関係づくりプログラムに関しては、武蔵・河村(2004)が大学生を対象に、 集団活動における緊張の緩和、不安の軽減をねらうアイスブレイキング、 新たな人間関係を築くための小集団によるかかわり、 非言語コミュニケーションによる信頼体験、 感情や価値観の表明、という4つのねらいを設定し、検討を行っている。武蔵らの研究対象である大学生は友人関係の発達段階においては、ピアグループ段階と考えられる。それ故、お互いの異質性にふれる「感情や価値観の表明」は欠かせないが、本研究の対象である高等学校新生は友人関係の発達段階においては、チャムグループ段階と考えられる。そこで、本研究プログラムは、武蔵らのプログラムの中の、アイスブレイキング、小集団によるかかわり、非言語コミュニケーションによる信頼体験の3点に焦点を当て、仲間同士の一体感をより多く感じることができるといった内容構成として、友人関係づくりの効果について検討したい。

[方法]

1. 対象者

A女子高等学校(以下、A校)1年生7クラス280名。A校は、中核市であるB市の住宅街に位置する進学校である。

2. 実施時期・場所

本プログラムは、200X年4月、新入生オリエンテーションの活動の一つに位置づけ、全体を2班に分けて140名ずつ各1時間行った。筆者がリーダーとなり、その他に5名のA校教師がサブリーダーとして活動に参加した。活動はX県青少年交流センター体育館にて行った。

3. 実施プログラム

本プログラムの内容は、國分(1999)の提案したエクササイズ及び武蔵・河村(2004)による研究知見を参考にして、 集団内の緊張や不安を軽減するエクササイズ、 小集団におけるメンバー間のかかわりを楽しむエクササイズ、 メンバー間の信頼を体験するエクササイズ、の3本の柱で構成した(Table 1)。

4. 手続き

新入生オリエンテーション後、対象者に対して、学校に戻ってから各学級ごとに質問紙調査を実施・回収した。調査実施日に欠席した生徒を除いた236名分のデータを分析対象とした。質問紙は、プログラムを通じた友人関係づくりについての自己評定と自由記述によって構成した。なお、質問紙は個人の特定ができないよう、無記名とした。

Table 1 グループ体験プログラムの内容

活動形態	エクササイズ	<ねらい>・内容
集団全体 (140人)	ジャンケン列車	<緊張・不安軽減>・出会う人とジャンケンをして、負けた人は勝った人の肩に手を乗せ、電車の形に連なっていく。*グルーピング(4人組づくり)を兼ねる。
小集団 (4人)	バースデーライン	<緊張・不安軽減>・小集団(4人)内で、誕生日順に非言語で円状に並び、
*ホーム グループ	ネームゲーム	<メンバー間のかかわり>上記の並びで、誕生日の一番早い人が最初に名前を言う。次の人は「さんの隣の です」と名前を続けていく。一巡したら、次は名前プラス好きな食べ物を加え、「が好きな です」と言い、同様に続けていく。
	ゴジラとゴリラ	<メンバー間のかかわり>・2人組で向き合って立ち、前に両手を伸ばしてお互いの手のひらを挟むようにする。「ゴジラ」「ゴリラ」の役割を決め、リーダーが呼んだ役割の方は、相手の手のひらを挟む。呼ばれない役割の方は両手を挙げて逃げてよい。
	トラストウォーク	<信頼体験>・2人組になり、一人が目をつぶり、一人が体育館内をリードする。非言語で、役割交代して行う。

[結果]

1. 生徒の自己評定

「あなたは新入生グループ体験プログラムを通して友人関係づくりがうまくいきましたか」という教示に対して、2件法(うまくいった-うまくいかなかった)で回答を求めた。その結果、「友人関係づくりはうまくいった」という肯定的な回答は229名(97%)、「友人関係づくりはうまくいかなかった」という否定的な回答は4名(1.7%)、記入なしは3名(1.3%)であった。

2. 自由記述分析

自由記述は、内容のまとめりごとに、「内容満足度」、「緊張・不安軽減」、「友人関係づくり」、「信頼体験」、「その他」の5項目に整理した。これらの結果はTable 2に記した。内容満足度に関する記述は56.4%であり、「楽しかった。ためになった」等、活動そのものを積極的に評価する記述が多かった。緊張・不安軽減に関する記述は6.8%であり、「初めは友達ができるのか不安もあったけれど、実際たくさんの人と友達になれて本当によかった」等、生徒の安堵感が伝わってくるような記述が示された。友人関係づくりに関する記述は75.4%であり、「初めて会った人とこんなに楽しくできたのは初めて」等、本プロ

グラム所期の目的を達成したことを示唆する記述が多く見られた。また、逆にわずかではあるが、「もっと積極的に話せばよかった」、「知らない人であまり話せなかった」等、友人関係づくりがうまくいかなかった記述も見られた。信頼体験に関する記述は 25.8 % であり、「相手を 100 %信用することができ、友情が深まった」等、相手を信頼することの大切さにふれる記述が示された。その他に関する記述は 11.9 % であり、「友達はこんな小さなきっかけでできるものだ実感した」等、関係づくりにおける「きっかけ」の大切さにふれる記述が示された。

Table 2 生徒自由記述の結果（一部抜粋）

-
1. 内容満足度について (56.4 %)
(例) 楽しかった。とてもためになった/みんなと仲よく楽しむことができた/話したことがない人とも一緒にゲームができて楽しかった/クラス関係なくみんなで楽しむことができた/ありがとう、グループエンカウンター等

 2. 緊張・不安軽減について (6.8 %)
(例) 初めは友達ができるのか不安もあったけれど、実際たくさんの人と友達になって本当によかった/他のクラスの友達が何人かできたので来年のクラス替えの心配が和らいだ/久しぶりに大きな声で笑え、少し緊張がほぐれた 等

 3. 友人関係づくりについて (75.4 %)
(例) 初めて会った人とこんなに楽しくできたのは初めて/4人ともとても仲よくなったので絶対これからも声をかけ合ってもっと仲よくなりたい/ここでできた友達を大切にしたい/今までよりもっと友情を深めることができた/もっと積極的に話せばよかった/知らない人であまり話せなかった 等

 4. 信頼体験(トラストワーク)について (25.8 %)
(例) 相手を 100 %信用することができ、友情が深まった/相手を信頼することで仲間ができた/マジで友達を信頼でき、友達っていいなあと思った/相手から「信頼できた」と言われうれしかった/信頼することの楽しさがわかった 等

 5. その他 (11.9 %)
(例) 友達はこんな小さなきっかけでできるものだ実感した/きっかけがないとうまくいかない友達づくりもきっかけができてたくさんの友達ができた/身体を使ったコミュニケーションは交流しやすかった/ 等
-

* アンダーライン部分は結果や考察中に引用している記述

[考 察]

本研究の結果から、高等学校新入生に対するグループ体験プログラムの効果について考察を加えたい。

現在、義務教育段階における学校現場の喫緊の課題として「中1プロブレム」の問題が報道等を通して取り上げられることが増えてきている。文部科学省(2007)の学校基本調

査によれば、平成 18 年度の不登校児童生徒数は、小学校 6 年生 8164 名に対し、中学校 1 年生 23820 名となっている。また、平成 18 年度のいじめ認知件数は小学校 6 年生 13047 件に対し、中学校 1 年生 24023 件となっている。いずれも、他の学年間比較に照らしてみると、大幅な増加であることが示されている。この中 1 プロブレムを生む要因の一つとして指摘されているのが、「体験で学んだ人づきあいのやり方」(小林、2001)であるソーシャルスキルの不足ということである。文部科学省(2007)の高等学校不登校、中途退学者のデータにおける 1 年生の発生比率の高さを考慮すれば、中 1 プロブレム同様、生徒のソーシャルスキルの不足が要因の一つとしてあるのではないかと考えられる。

生徒は、各自の希望と学力の状況を摺り合わせながら、高等学校を選定し、受験する。4 月の入学時には様々な中学校から、様々な思いを持った生徒が新たに出会い、高等学校生活をスタートさせる。高等学校 1 年生の学校適応感について 4 月、7 月の違いを比較検討した植村(2003)によれば、入学当初の適応感の高さが明らかになっている。入学当初は、「どんな友だちに出会えるのだろうか」、「どんな授業があるのだろうか」、「部活動は何に入ろうか」等、期待と不安で胸がいっぱいの生徒が多いことだろう。それ故、入学直後に、生徒の期待を受け止めると共に、不安を軽減させるオリエンテーションプログラムの実施が欠かせないと思われる。マズロー(1987)の欲求階層説において「安全欲求」は「生理的欲求」に次いで人間が求める基本欲求であることが示されている。「この学校にいとホッとすると、この友だち、先生がいれば、私は安心」というように、生徒の「安全欲求」を満たすための様々な働きかけの工夫が、人間関係づくりの初めの一步として、学校現場に明確に位置づけられる必要があると考える。本研究におけるグループ体験プログラムは、その働きかけの一つである。SGE を取り入れたグループ体験プログラムの先行研究である武蔵・河村(2004)のプログラムは、ペアづくりとそのペアを基本として構成された小集団での活動へと展開するものである。武蔵・河村(2004)のプログラム対象は大学生であり、友人関係の発達段階として、「集団内への出入り自由」が特徴とされるピアグループが想定されることから、ペアを基本にした活動展開が効果的に作用したと考えられる。しかしながら、本研究の対象は高等学校入学直後の 1 年生であり、友人関係の発達段階として、「私たち同じよね」等の言葉による符牒など仲間への強い同調性が特徴とされるチャムグループが想定されることから、時間内固定の小集団(4 人で構成。ホームグループ)による活動展開とした。1 時間の活動時間において、エクササイズ体験を通し、「このメンバーが仲間である」という意識が育まれることをねらった展開である。また、入学直後の関係性が弱い生徒同士であることも考慮し、活動時の簡潔、明確な指示に留意してグループ全体をリードすることを心がけた。このように、友人関係の発達段階や入学直後の関係性の状態を考慮したプログラムの内容・展開により、プログラムに対する事後の生徒評定が高く、「4 人ともとても仲よくなったので絶対これからも声をかけ合ってもっと仲よくなりたい」等、所期の目的を十分に達成したと考えられる自由記述が多く記されたのではないかと考えられる。本研究の対象は、女子生徒であり、植村(2003)による「高等学校においては女子が男子に比べて親和動機が強く、より仲間志向的である」という知見にあるように、グループ体験プログラムが効果を生みやすい状況にあったともいえよう。それ故、今後は、男子校、及び共学校におけるプログラム実践と効果の検証が課題である。

[参考文献]

A．マズロー．1987．人間性の心理学．産能大学出版部

國分康孝．1999．エンカウンターで学級が変わるパート3 中学校編．図書文化

小林正幸．2001．学級再生．講談社．196-197.

文部科学省．2007．平成 18 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について

文部科学省．2007．生徒指導上の諸問題の現状について．文部科学省初等中等教育局児童生徒課

武蔵由佳、河村茂雄．2004．構成的グループ・エンカウンターのプログラム展開に関する一考察．カウンセリング研究第 37 巻第 2 号．115-123

植村善太郎．2003．中高一貫校への外部入学者の対人関係と学校適応感～ある国立大学附属高校における事例的検討～．カウンセリング研究第 36 巻第 1 号、57-67

吉原寛、藤生英行．2005．対人関係のあり方と学校ストレス、ストレス反応との関係．カウンセリング研究第 38 巻第 2 号、128-140